

弱き者の文学に魅せられ… 大野光子さん

アイルランド文学普及に尽力し大統領功労賞

詩人イエーツに、作家ジェイムズ・ジョイス、オスカー・ワイルド。アイルランドは、偉大な文学者を数多く輩出しているが、作品は長らく「英国文学」の一部とされてきた。そんな状況の中で半世紀近く、日本でのアイルランド文学の普及に尽くしたのが、愛知淑徳大名誉教授の大野光子さん(左)だ。二〇二〇年の同国大統領功労賞を受け、来月二日、首都ダブリンで開かれる授賞式に臨む。

功労賞は海外在住のアイルランド人や、同国への貢献が認められた人などが対象。これまで俳優のリーアム・ニーソンさんやペルー人のノーベル賞作家マリオ・バルガスリヨサさんらが受賞している。在日アイルランド大使館によると、大野さんの受賞は日本人では三人目で、女性では初。

大野さんがアイルランドの文学と出会ったのは、米国に留学



アイルランド大統領功労賞を受賞し、喜びを語る愛知淑徳大の大野光子名誉教授

していた大学時代。十九、二十世紀にかけて活躍したイエーツの作品に触れたのをきっかけに、大学院でアイルランド文学の研究に進んだ。

ただ、当時の日本では英文学といえば文字通り「英国」の文学。米国学の研究者すら少数だった。だが「英国の英文学からの視点では見えない景色があるのではないか」。関心は、ア

イルランドの女性の作品に向かった。「弱い立場の人たちのつらさや希望が、アイルランドの作家たちが紡いできた文学にはあった」

一九九〇年、アイルランドの国民的詩人ヌーラ・ニー・ゴールさんの詩「ファラオの娘」を学会発表で知った。英語が一般的な同国の文学にあって、ゴールさんが創作に用いたのは、将来消滅すると当時言われていたアイルランド語。詩句は、父権主義的なアイルランドの社会で抑圧されてきた女性の声を代弁していた。「研究者としてというよりも、心底から訳したい、と思わせる詩でした」

二年後、ダブリンを訪れた際にゴールさんと知り合い、二人で十年かけて対話を重ねながら日本語に翻訳。日本で初となる詩集を出版した。やがて、その邦訳詩集を読んだ津軽三味線

奏者の二代目高橋竹山さんらが、作品に触発されて独自の表現を切り開いていることも知った。「作品が日本で受容され、新しい芸術が生まれていることを伝えよう」。ゴールさんと同じ「声」を抱えた芸術家たちの活動を、アイルランドで発信するようになった。

「アイルランドで死ねますように」。約二十年前、回国北西部スライゴーでのセミナーに参加した際、現地のイエーツ協会の会長からそう言われた。海外への移民や離散を重ねてきたアイルランドで、祝福を込めて別する人に向ける言葉だという。「あれ以来、自分の魂は半分アイルランドに置いてきたつもりだった。置いてきた魂は今も持ち帰って、これからも詩の懸け橋として日本とアイルランドをつないでいきたい」

(宮崎正嗣)

日本での昇華 伝えていく